

聞こえません、見えません、  
だから私を  
ほつといてください。

◆ ————— ◆  
gacchi

Regina  
BUNCO

# 登場人物紹介

CHARACTER

## エメラルダ

国王の側妃。  
腹黒い性質で、  
義娘を使い何か  
企んでいて……

## リンジー

レオンハルトの  
婚約者を自称する  
侯爵令嬢。

## ジョージア

レイフィアの兄。  
妹以外の家族を嫌い、  
家を出て魔術師として  
暮らしている。

## レオンハルト

レイフィアの学園の同級生で公爵家の  
次男。呪いをかけられていたが  
レイフィアに助けられ彼女に好意を抱く。

## レイフィア

家族から虐げられていた伯爵令嬢。  
解呪の力があるがそれを隠して  
目立たず生きていた。

## 目次

聞こえません、見えません、  
だから私をほつといてください。

書き下ろし番外編  
レオナルトの子

聞こえません、見えません、  
だから私をほつと置いてください。

## 第一章

眠い……あくびを我慢しながら移動教室へと急ぐ。

誰かに見られたかと思ったが、あたりは人がまばらで、誰も私——レイファイアのことなど見ていてなかつた。

昨日の夜、ジョージアお兄様が屋敷に帰つてきた。久しぶりに会えたからうれしくて、つい遅くまで話し込んでしまつた。なにせ前に帰つてきた時から、ひと月と少しぶりだつたのだから。

お父様が再婚して以来、この家はお義母様が中心の家になつてしまつた。お父様にとつて前妻の子であるお兄様と私は邪魔でしかなかつたようだ。

お義母様や義妹と顔を合わせると、嫌味を言われるだけならまだしも、頬を叩かれたり突き飛ばされたりすることもよくあつた。それを見たお父様が助けてくれることはない。だから、できる限り顔を合わせないように、まるで存在しないかのように私室にこお兄様に会えるのはいつも夜中だ。

もつて暮らしている。

そんな状態が何年も続いて、お父様の跡を継いで伯爵になるはずだったお兄様は、学園の卒業と同時に家を出でしまつた。お父様の許可を得ずに家を出るというのは、伯爵家との縁を切るのも同然だつた。そのため誰にも見つからないように帰つてくるから、お兄様に会えるのはいつも夜中だ。

家との縁を切つてまで出ていったお兄様が私に会いに来るのには、理由があつた。魔力がある者でもめつたに発現しない特別な魔術、その者にしか使えないという固有スキルを持つお兄様は、私を守るために魔術をかけてくれていた。こういった魔術は長期間効果を持続させることができが、たまに帰つてきて私に魔術をかけ直してくれる。そして無事であることを確認すると、いつものように注意される。

「いいか？あと少しだから我慢するんだ。目立たないように、こつそりと、おとなしく過ごすんだよ」

「ええ。わかつたわ。学園でも家でも、おとなしく我慢しているわ」

「レイファイア。あと少しだ。俺が迎えに来るまで、見つからないように頑張るんだ。いいね？」

を押される。

大丈夫、こうしておとなしく過ごしていれば、誰にも見つからない。一人で歩いていようが、あくびをしていようが、私のことは誰も気に留めていない。いつもどおりにはさばさの髪で顔を隠し、華美にしていない制服で、騒がしい学生たちとは距離を取つて廊下を歩く。人が少なくなつてから移動したので、もう休憩時間は残り僅か。

次の国史の授業は教師が厳しいことで有名だ。もし遅刻しようものなら立たされて目立つてしまふ。そうならないために急がなければならなかつた。

この階段を下りれば国史の教室に着く。

階段を下りようとしたところで、耳障りな音に気がついた。

リーン。リーン。リーン。

音が聞こえてくる。嫌な音だ。聞きたくないけれど耳をふさぐこともできない。聞いたことのない音だが、これはあれに違いない。

止まらないその音は、階段の下から聞こえてくる。

どうしようか。本当なら音のする場には近寄りたくない。だけど違う階段を使って移動したら、授業に間違なく遅れてしまう。一瞬だけ悩んで、ため息をついて歩き出す。

大丈夫、気がつかないふりで足早に通り過ぎればいい。

こんな地味な生徒が通り過ぎても、気にも留めないだろう。

少しだけ足を速めて階段を下りていく。下のフロアに学生が何人かいるのが見えた。「ジルベスター様、わたくしは何度も申し上げました。どうしてその男爵令嬢をジルベスター様のそばに置いていますの？」

「お前には関係ないだろう」

「わたくしはジルベスター様の婚約者ですよ。そしてここにいる令嬢は皆、ジルベスター様の側近の婚約者たちです。わたくしたちとは一緒にいてくださいなのに、どうしてその者はずつとそばに置くのです」

「友人だからだと言つてはいるだろう。俺だけじゃない。皆で一緒にいるだけだ」「友人だからだなんて、しらじらしいですわ」

問題は音だけじゃなかつた。それ以上に厄介な場に近づいてしまつた。

話を聞いている限り、男性側の浮気による痴話喧嘩だ。

婚約者がいるのに他の女性をそばに置いていたら、それは間違なく問題になる。

それを責めるのはわかるけれど、他人が通る場所ではやめてほしい。

これは授業に遅れてでも、違う階段を使うべきだったかも知れない。

「わたしの女性のお友達がいなくて。皆さん、それを心配して一緒にいてくれるんです。ジルベスター様も一緒にいてくれるお友達ですよ? だから、そんなに怒らなくて も……」

「ミーシャ、君が悪いわけじゃないよ。気にしないで」

「そうだよ、ミーシャは悪くないよ」

「こんなにアンジェラが口うるさいとは思わなかつたな。いくらジルベスターの婚約者でも俺たちの行動に口を出しすぎじゃないのか?」

「レオンハルト、あなたまでこの男爵令嬢を庇うの!」

「すまないな、レオンハルト。俺のことでお前たちまで巻き込んでしまつて。いつからアンジェラはこんなに口うるさくなつたのだ」

「ジルベスター様! ……そこまでおっしゃるのなら、こちらも婚約を考え直しますわ。皆様、いいですわよね?」

あ……ついに婚約解消の話に発展している。

まさかこんなところでそんな話が出るなんて。こんな話を聞いていたとなれば家同士の争いに巻き込まれかねない。どうしよう。

早く通り過ぎないと……静かに、見つからないように……

「あつ!」

階段の最後の一段で滑つて、転びそうになつた。慌てて手すりにつかまり転ばずには済んだけれど、声を出してしまつた。

しまつた! と思って、そちらを見たら……注目されていた。

何人かの令嬢を後ろに引き連れている令嬢は泣きそうな顔をしている。

その反対側では小柄な黒髪の令嬢を、令息たちが守るように囲んでいる。

令息たちを見て視線が止まる。全員が赤い呪術の糸で全身をぐるぐる巻きにされたいた。

一人は顔まで執拗に巻かれていて、誰なのか全くわからなかつた。

そんなおかしな状況なのに、誰もそのことには気づいていない。私だけに見える糸……どう考へてもこれはまともな状況ではない。

それ以上に、私に視線が集まっていることに耐えられなかつた。

「し、失礼いたしました!」

一言だけ謝つて、慌てて小走りで去る。

すぐさま国史の授業教室に入り、後ろの席に座つた。

かつたようで少しだけほつとする。

ゆっくりと息を整え落ち着こうとするが、心臓がどきどきして、すぐには落ち着けそうになかった。

あれはなんだつたのだろうか。今まで見たものとは全く違っていた。

初めて見た呪術だつた……もしかして、魅了の類たぐいなのだろうか。

もしそうなら大変なことになるけれど。

そこまで考えた時、この学園の結界を思い出した。

この学園には魔術が使える令息令嬢がたくさん通つている。間違つても魔術が暴発しないようにと、演習室以外の区域は魔術が使えないよう結界が張られている。そのため学園長は結界魔術が使える数少ない魔術師である王弟殿下が務めていた。

だから魅了なんて強力な呪術が学園内で使えるはずがなかつた。

だけど、それならあれはなんだつたのだろう。

リーン、という音も今まで聞いたことがない音だつた。

害がない魔術ならば私に音が聞こえることも、見えることもない。あれは呪術だ。だけど、あの呪術にどんな害があるのまではわからなかつた。

わからな以上、気の仕方がない。もう関わらなければ問題ないはずだ。

私は何も聞いていない。何も見ていない。

こんなところで目立つわけにはいかないのだから。

レオン・ハルト、ジルベスター、この名前を聞いて気がつかないほど、私は社交界に疎うとかつた。

もし気づいていたなら対処は違つていたかもしれない。

どうしてもつと注意を払わなかつたのかと、この後で何度も悔やむことになる。



前を向くのが怖い。

うつかり変な動きをしたら、私が呪術の糸を見えていたことに気がつかれてしまうかもしれない。

目の前にいる、赤い糸でぐるぐる巻きの令息から目をそらしたい。この人は、間違いなくあの時の令息だ。中でも一番ぐるぐる巻きにされていた令息。あれ以来ずっと会わなかつたから、すっかり忘れていたのに。

この学園は十五歳で入学し、基本的なことを学ぶ三年間の基礎科と自分で授業を選択する本科の二年間の計五年間を過ごす。本科一年目は皆が十八歳になることから、社交界に出る準備をする授業も含まれていた。

今日はその一環として本番のようにダンスを練習しようと、ホールに学年全員が集められ入り口でくじを引かされた。

パートナーを各自で決めると、あぶれてしまう者が出るからだろう。

そう、私のような者が。

「まあ、レオンハルト様のお相手、あの方なの？」

「いやだわ。私が代わって差し上げたいわ」

こそそそと話しているよう、実は私に聞こえるように話しているのはわかっている。わかっているけれど、ここで辞退したら、それはそれで問題になる。  
誰にこのくじを譲るかで揉めたら、大騒ぎになつて先生に気がつかれてしまう。  
本当は代わってほしいし、誰でもいいからこのくじを押し付けてしまいたいくらいだけど。

言えるわけがない……公爵家次男のレオンハルト様と踊るのは嫌だなんて。  
でも、目の前にいるぐるぐる巻きの令息と踊るのは怖い。

頭から足まで赤い毛糸のようなものにぐるぐる巻きにされていて、特に目の周りは何重にも巻かれているから、どんな人なのか全くわからない。  
そんな方と踊る？ 手を取るのも怖いけど……逃げたら失礼になるし、目立つことになる。

公爵家相手に伯爵家の私がそんな失礼なことをできるわけがないし、レオンハルト様の相手役として目立つてしまつていて今、これ以上おかしなことはできない。  
覚悟を決めてレオンハルト様に向かい合つた。

そして形ばかりの挨拶<sup>あいさつ</sup>を交わし、位置に着く。

ゆつくりと静かな音楽が始まると、周囲も一斉に動き出した。

どこを見ていいかわからず、相手の胸のあたりに視線を落とし、リードされるままになる。

手を取られ、背中に手を回されても、ときめきよりも未知のものへの怖さが勝つてしまう。  
絶対にぎこちない動作になつていて、それは緊張しているせいと周りは見てくれるだろう。

恐怖でぞわぞわするけれど、一曲だけ我慢して踊つてしまえばいい。

あとは……後ろで待ち構えている他の令嬢に代わればいい。

ふと何かが動いたような気がして見ると、レオンハルト様の胸のあたりの赤い糸が動

いていた。

え？ と見上げると、少しずつ顔のぐるぐる巻きもほどけてきている。

ゆつくりだけど、確実に一本ずつほどけて、ふつと細かくなつて消えていく。

これは、なに？ どうなつているの？

あまりの驚きに目を離せずにいると……顔が見えてくる。

銀色の髪が見え、眉が見え、少し細めだが綺麗な紫の目が……目が合つた！

しまつた。糸に気を取られて、顔を見つめ続けるなんて失礼なことを！

レオンハルト様は、はつとした顔になり、口を開いた。

「……君は？」

何か話しかけられたと思つたらレオンハルト様の足が止まる。

ダンスの途中なのに動きが止まつてしまつて、仕方なく私も足を止める。

男性側にリードされなかつたら動けない。いつたいどうしたの？

止まつてしまつた私たちに、見学していた人たちがざわつき始める。

「君の名前は？」

「……レイフィア・ルガード。ルガード伯爵家の長女です」

最初に挨拶したのに、全く覚えてもらつていなかつたらしい。

それにしても途中で止まつてしまつてまで名前を聞く必要があつたのだろうか。

疑問に思つたとしても問うことはできず、黙つてレオンハルト様の次の動作を待つ。

「ルガード家か……」

話しているうちに曲が終わつてほつとする。

このまま近くに待機している令嬢に交代できれば……そう思つて礼をして離れようと

したら、手をつかまれてもう一度ホールドされる。

「先ほどは途中で止まつてしまつた。これでは練習にならないだろう？」お詫びにもう

一度踊つて、指導してあげるよ」

につこりと笑つて言つてレオンハルト様にうなづくことしかできなかつた。

後ろで交代しようとした令嬢たちが文句を言つてゐるのが聞こえる。

「まず、背筋を伸ばして。そう。顔を上げて、俺の目を見て。足は踏んでもいいから、下を見ないで動いて」

先ほどまで黙々と踊つていた人とは別人のようだ。

私が合った彼に微笑みかけられ、反射的に顔が赤くなってしまう。

こんなに近くで令息と目を合わせることになるなんて初めてで、どうしていいかわからない。

私は誰が見ても地味な令嬢だ。

黒髪はぼさばさ、緑の瞳は長い前髪に隠され、いつもうつむいて歩き人と目を合わせない。誰かと話しても必要最低限で、常に一人で行動しているような子だった。

ダンスの授業とはいえ、こんなに近くにいると恥ずかしくなってしまう。

さっきまではレオンハルト様の顔を知らなかつたが、あらためて見ると令嬢たちが騒ぐのも無理はないと思うほど整った顔立ちだった。

ただでさえ令息に慣れていないのに、これほど素敵な令息と踊るなんて耐えられなかつた。思わず身体を離そうとしたら、背中に回された手で押さえられる。

「身体を離さないで。一定の間を置いて、ちゃんと動きについてきて。逃げないでこちらにもう少し踏み込むように、そう、上手」

指導してあげるといった言葉どおり、レオンハルト様は悪い点をしっかりと伝えてきた。

こんなに真剣に指導してもらつていると、眞面目にやらなければという気持ちになる。



まだ恥ずかしさはあるが、授業だと自分に言い聞かせて落ち着かせる。

「動きがよくなってきた。呑み込みが早いな。できるつて信じて、自分に自信を持つといいよ。綺麗に踊っている」

意外な褒め言葉に驚いたが、素直にお礼を言う。

「ありがとうございました。ダンスは苦手でしたが、こんなに楽しく踊れたのは初めてです。ご指導ありがとうございました」

もう一度しつかりお礼を伝えて、すぐに後ろへ下がる。いいかげん他の令嬢に代わらないと後が怖い。レオンハルト様は何かを思い出したようで、先生のところへ向かっていた。

令嬢たちからため息が聞こえ、からまれる前にホールを出る。レオンハルト様の赤い糸は途中で消えてしまつたけれど、結局なんだつたのかわからないままだつた。

次の週になり、いつものように大教室の後方の隅に座る。

この授業は人気がない分、人が少なくて落ち着いていられる。

教師を待つ間、先週の授業内容を確認しようとノートを見ていると、隣に人が座つた。

「そのノートを見せてくれないか?」

「え?」

そこには先週、間近で見ても見慣れなかつた、レオンハルト様がいた。

そのレオンハルト様が満面の笑みで私のノートを指さしている。

「どうして……レオンハルト様が?」

本科になつて半年、今までレオンハルト様と授業で会つたことはない。

私は少しほんやりしているかもしれないが、さすがにあんな糸でぐるぐる巻きの人に会えれば覚えている。会つことがなかつたというのは、選択授業がすべて違つことを意味していた。

「ちょっと事情があつて選択授業を全部変更することになつた。おかげで今までの授業の内容がわからなくて。教師からも誰かからノートを借りて見るよう」と言われている。君はきちんとノートを取つているみたいだから、見せてくれないか?」

「授業は休んでいないし、黒板に書かれたことはすべてノートに書き写している。」「誇ほこれるほど綺麗な字ではないけれど、丁寧に書いている。人に見せるくらいはかまわなかつた。」「レオンハルト様にノートを差し出すと、ありがとうと言つてそのまま隣の席で確認し始めた。」「もしかして隣の席でずっと授業を受けるつもりなのだろうか。この教室は広い上に生徒が少ないため、友人同士でもない限り隣合つては座らない。周りからの視線が痛い気がする。いや、怖くて周りを見ていないけれど。私がこんなに焦あせつているのにレオンハルト様は動じず、そのまま隣で最後まで授業を受けた。」「授業が終わつたらすぐにノートを返してもらつて、次の授業に向かおうと思つていたのに、ノートを返してくれたレオンハルト様はまた違うお願いをしてきた。」「君はきちんとノートを取つているね。板書だけじゃなくて、先生の発言まで書いてある。すごいな。字も綺麗で、とてもわかりやすかつた。ついでにお願いしたいのだけど、君の選択授業の時間割を見せてくれないか?」

どうしてとは思つたが、これ以上騒がれると周りが怖い。早くレオンハルト様に離れてほしくておとなしく時間割を見せる。

「ああ、君の選択授業、俺と全部一緒にだ」「え?」

「授業ごとにノートを見せてくれる人を探すのは大変でね。この後も一緒に授業を受けさせてくれないか? 君のノートは完璧だった。こんな完璧なものを見たら、他の人のノートでは物足りない」

レオンハルト様の声は少し大きく、周りにも聞こえたようだ。ノートを差し出そうとしていた令嬢たちが一齊に自分のノートを確認し、あきらめた様子で離れていた。たしかにこれほど真面目に授業を受け、ノートを書いている令嬢はいないと思う。学園の成績は公開されていないし、王宮に勤めるつもりでもなければ成績は関係ない。そうなれば嫁ぐだけの令嬢が真剣に授業を受ける必要もないわけで、私がこれほど真面目に授業を受けているのは他にやることがないからという理由だつた。

レオンハルト様が言う、ノートを借りる人を探すのが大変という事情はよく理解できてしまつた以上、強く断ることもできなくなつてしまつた。

結局そのままレオンハルト様に連れていかれ、すべての授業を隣で受けることに

そうお願いされてしまうと断る理由がなかつた。

授業は休んでいないし、黒板に書かれたことはすべてノートに書き写している。

「誇ほこれるほど綺麗な字ではないけれど、丁寧に書いている。人に見せるくらいはかまわなかつた。」「レオンハルト様にノートを差し出すと、ありがとうと言つてそのまま隣の席で確認し始めた。」「もしかして隣の席でずっと授業を受けるつもりなのだろうか。この教室は広い上に生徒が少ないため、友人同士でもない限り隣合つては座らない。周りからの視線が痛い気がする。いや、怖くて周りを見ていないけれど。私がこんなに焦あせつているのにレオンハルト様は動じず、そのまま隣で最後まで授業を受けた。」「授業が終わつたらすぐにノートを返してもらつて、次の授業に向かおうと思つていたのに、ノートを返してくれたレオンハルト様はまた違うお願いをしてきた。」「君はきちんとノートを取つているね。板書だけじゃなくて、先生の発言まで書いてある。すごいな。字も綺麗で、とてもわかりやすかつた。ついでにお願いしたいのだけど、君の選択授業の時間割を見せてくれないか?」

どうしてとは思つたが、これ以上騒がれると周りが怖い。早くレオンハルト様に離れてほしくておとなしく時間割を見せる。

「ああ、君の選択授業、俺と一緒にだ」「え?」

「授業ごとにノートを見せてくれる人を探すのは大変でね。この後も一緒に授業を受けさせてくれないか? 君のノートは完璧だった。こんな完璧なものを見たら、他の人のノートでは物足りない」

レオンハルト様の声は少し大きく、周りにも聞こえたようだ。ノートを差し出そうとして見せてくれないか? 君のノートは完璧だった。こんな完璧なものを見たら、他の人のノートでは物足りない

レオンハルト様の声は少し大きく、周りにも聞こえたようだ。ノートを差し出そうとして見せてくれないか? 君のノートは完璧だった。こんな完璧なものを見たら、他の人のノートでは物足りない

レオンハルト様が言つた通りでもなければ成績は関係ない。そうなれば嫁ぐだけの令嬢が真剣に授業を受ける必要もないわけで、私がこれほど真面目に授業を受けているのは他にやることがないからという理由だつた。

レオンハルト様が言つた通りでもなければ成績は関係ない。そうなれば嫁ぐだけの令嬢が真剣に授業を受ける必要もないわけで、私がこれほど真面目に授業を受けているのは他にやることがないからという理由だつた。

結局そのままレオンハルト様に連れていかれ、すべての授業を隣で受けることに

完璧なノートの話が伝わっていたのか、他の令嬢から直接責められることはなかつたけれど、遠巻きにしている令嬢たちの目が怖い。

昼も、お礼だからとレオンハルト様の専用個室に連れていかれ、一緒にめになつた。せつかくいただいた食事だが、何を食べたのか記憶がない。

目の前で微笑んでいる貴公子に、精神力が削ら  
何がどうなつて、こんなことになつてゐるの？

帰りの馬車の中、一人うなだれていた……明日からの学園生活が怖い。今日一日で令嬢たちにどれだけ注目されたか。

せつかく目立たないように三年半過ごしてきたのに、その努力が無駄になりかけて  
いる。

せめてこの話が下の学年に在籍している義妹には伝わらないでほ  
られてしまつたら、どんなひどい仕打ちをされるかわからなかつた。

だけど、私の波乱の生活はまだ始まつたばかりだった。

レオン・ハルト様と一緒に授業を受けるようになつてから二週間たつても、私はまだ解放されていなかつた。

もあるだろう?」

そうレオン・ハルト様に言われてしまい、また断れなかつた。

最初の数日間はノートのことがあるために断る理由もなかつたが、一週間も過ぎればノートもすべて書き写せているはずだし、もう私は必要ないだろうと思つていたのに。

半年間も遅れて授業を取るのだから知らないことが多いのはそうだろうし、授業でわからない時にすぐに聞きたいと言わてしまえば断りにくい。気がついたら全授業を隣で受け、昼は個室で一緒に食事をし、そのまま馬車に乗るのを見送られるまで拒否する間を与えられずにいた。

私、レオン・ハルト様に何かしてしまったのだろうか……

私なんかと一緒にいて、いいことがあるのだろうか。

ほどけていった赤い糸。ぐるぐる巻きだつたレオンハルト様。同じようにぐるぐる巻

きだつた周りの令息たち。

あれと何か関係するのだろうか。

私と踊った時に赤い糸がほどけたことも関わっている?

でも、それをこちらから聞くわけにはいかなかつた。

私の固有スキルは、誰にも言つていないのでから。

しかし、その疑問は日に日に強くなつていつた。

周りの令嬢の視線が怖い上に、今はレオンハルト様が何か知つてゐるのではないか、そんな不安で少しも落ち着かなかつた。

レオンハルト様に微笑まれるたびに、どうしていいのかわからなくなつていく。

「これ、受け取つてくれないか?」

授業が終わつて人がほとんどいなくなつた教室で、レオンハルト様から何かを手渡された。

「これはなんですか?」

手渡されたものは、長細い小さな軽い包みだつた。綺麗に包装されて可愛らしいリボンで結ばれている。

「開けてみて?」

その場で開けてみると、木でできた小さな櫛だつた。

「櫛?」

「そう。それを使うと艶<sup>つや</sup>が出て、まとまりやすくなるらしい。……この櫛をレイフィアの髪で試してみていいだらうか?」

「えつ。試すつて」

「ちよつと知り合いかから頼まれて。俺に姉妹はいないし、他に頼めるような女性の知り合いもいなないから。実験に付き合つうと思って、髪を貸してくれないか?」

驚いているうちに、私の手から櫛<sup>くし</sup>を取つて後ろに回る。素早い動きに抵抗することも忘れ、気がついたらレオンハルト様に髪を梳<sup>く</sup>かされていた。

……令嬢の髪つて、簡単にふれさせていいものだつただろうか。

「ああ、やっぱり。レイフィアは綺麗な髪なのに、わざとぼさぼさにしていたのか。見られたくないのかと思つて人がいない時間にしてよかつた」

「……」

れなくなっていた。使用者からも体調でも悪いのかと心配されるほどだったが、自分で全くわからなかつた。昔からの友人が離れて、周りで婚約解消が立て続けに起きて、それでも何も感じなかつた。問題だと気がつくこともなく過ごしていた。身体と頭と目を、何かで拘束こうそくされていた感じだつた。それも拘束こうそくがなくなつて初めて、自分がおかしかつたことを知つた

あのぐるぐる巻きのせいで、そんなことになつていたのか。レオンハルト様だけ異様に顔や頭に集中して糸が巻かれていたのは、そういうことだつたのかもしれない。

でも、どうしてその話を私に。

「レイフィアと踊つた時に、すべての拘束こうそくがなくなつた。少しずつ全身が軽くなつて、目が見えるようになつたと感じたら、目の前にレイフィアがいた」

「……気がつかれている？ どうしよう。どう誤魔化ごまかしたら。

「俺はレイフィアがきつかけだと思つていて。でも、それを誰かに言うつもりはない」「え？」

「何か隠さなきやいけない理由があるんだろう？」ああ、返事はしなくていいから。これは独り言だ。そのまま聞くだけでいい。それで、拘束こうそくがなくなつた後、王宮に行つて魔術の跡を調べてもらつたら、精神干渉系の魔術がかけられていたことがわかつた。し

かも未知のものだそつた。学園の結界を調べたところ、こちらも魔術が使えるように結界を変えられていた。おかげで王宮魔術師たちは大混乱だ。精神干渉はおそらく俺だけじゃなく、ジルベスターたちにもかかつてゐるはずだ。しかも、なぜか解術できた俺と違つて、ジルベスターたちは解術できないらしい。原因をさぐる間はまた影響が出たりしないようにと、俺はジルベスターたちから離れることになつた。それが選択授業を全部変更した理由

レオンハルト様はため息交じりに話し、ずっと私の髪を梳すいている。

丁寧に丁寧にゆつくりと梳すいてもらつたおかげで、さらさらと流れた髪が肩にかかる。

人に髪を梳すいてもらうのなんて、何年ぶりだろう。話の内容に危機感を持たなければいけないので、なぜか心が落ち着いていく感じがする。

「レイフィアの存在を知られたくない。俺は君のことを恩人だと思つていて。おそらく、このことが他に知られたら大騒ぎになるだろう。俺はレイフィアがいいように利用されるのは見たくない」

「私をいいように利用？ 何に？」

髪を梳すいていたレオンハルト様の手が止まり、頭を撫なでられる。

「大丈夫、落ち着いて。顔色が悪くなっている。そんなことがないように、レイフィアを守りたい。俺が一緒にいれば他の人は手を出せなくなる。公爵家の力も使えるから一緒にいればって。今の生活がしばらく続くということだろうか。」

「でも、私と二人で行動するなんて」

「それがね、ジルベスタたちと離れる理由にもちようどいい。解術できていらないジルベスタたちに本当のことを話すわけにもいかない。俺に好きな人ができて、その人と一緒にいたいからってことにしてる。自由に動く理由にもなるし、一緒にいて守る理由にもなる。レイフィアも解術のことは知られたくないだろう?」

私がレオンハルト様の好きな人つていうことにすると……そんなことが知られたら、何が起きるか。

でも、私の力が気がつかれることになつたら、そのほうが怖い。

あんなに目立つてはいけないってお兄様から注意されていたのに。

どうしよう。どうしたらいいの。

「ねえ、何を悩んでいる? これから一緒にいることで何か困るなら、聞いておきたい」

「レオンハルト様は人気があるので、他の令嬢から何か言われそうで怖いです。それに、婚約者や恋人はいらっしゃらないのですか?」

「それについては、どちらもいないから問題ない。他の令嬢たちについてもそつながらな  
いように対処しよう」

婚約者も恋人もいないと聞いて、少しだけほつとする。前に会つた時に集団で揉めていたこともあり、もしそんな人がいたら私が一緒にいるのはまずいのではないかと思つていた。

レオンハルト様側に問題がないとすれば、残るは私の問題だけ……

「私がレオンハルト様に好かれたなんて聞いたたら、義妹が怒ると思います。詳しくはお話しできませんが、義妹の機嫌を損ねると大変なのです」

「義妹か……わかつた。すぐには無理だが、それも対処する。他には?」

「……ありません」

本当は目立つたくないって言つたけれど、それはもう無理な気がしていた。

ここ二週間レオンハルト様と一緒にいたせいで、同じ学年のほとんどの令嬢に存在を知られてしまつただろう。それにこれからも一緒にいるというのなら、目立たないわけがない。

「じゃあ、明日からもよろしく。それと、今日の帰りから送り迎えもするから」

「えつ」

「他の令嬢たちが怖いと言つていたよな？俺と一緒にいる時は大丈夫だとは思つけれど、一人になつたら襲われるかもしねない」

「……よろしくお願ひします」

負けた。完全にレオンハルト様に負けた気がする。  
それ以上抵抗する気力をなくし、言われるがままエスコートされ、家まで馬車で送つていただきだ。

次の日の朝、レオンハルト様が迎えに来る時間の前から伯爵家の玄関で待つていた。  
レオンハルト様から贈られた櫛を使わないのは申し訳なくて、ぼさぼさの髪だけはきちんと梳かした。それでも顔の半分以上が前髪で隠れているけれど、顔を出して歩くようなことは許されない。

昨日の帰りに公爵家の馬車で送つてもらったことは隠せず、お父様たちから質問攻めにされたが、どうしてこうなつているのか私もわかつていないために、ほとんど答えられなかつた。

今日からは朝も迎えに来ることは伝えたが、その際に義妹のフルーラが喜んでいたのが気にかかる。

だからこそ、フルーラに見つかる前に出発したくて早くからレオンハルト様を待つていた。

やがて、遠くからでもすぐにわかるほど美しい馬車が近づいてくる。

伯爵家のどこにでもあるような馬車とは違い、公爵家の馬車は特別に作らせた一点物のようだ。通常の馬車よりもひと回り以上大きく、走行中の揺れも少ない。見た目以上に性能の差がよくわかる代物だった。

その馬車が伯爵家の玄関前に止まり、中からレオンハルト様が降りてくる。

私が待つてているのを見ると驚いた顔になつた後、晴れやかな笑顔に変わつた。

「おはよう、レイフィア。待つていてくれたのか？」

「おはようございます、レオンハルト様……」

大声を出すと中に聞こえそうで、挨拶が小声になつてしまふ。

「いや、そういうわけではないのですが……早く行きたいです」「もしかして、家の者に何も言わないで出てきた？」

「そこそことしている雰囲気を感じとつたのか、レオンハルト様も周りを窺つた。

公爵家の馬車に私を乗せるためにレオンハルト様が手を差し出してくれる。

その手を借りようとした時に伯爵家の玄関が大きな音を立てて開いた。

「お義姉様！」置いていくなんてひどいです！」

中から勢いよくフルーラが飛び出してくる。

赤い髪だけでも目立つのに、その髪には華美な飾りをついている。紺色の制服には縁取りに赤いレースが縫い込んであり、似合つてはいるがどう考へても学生としては派手だ。

本来ならお義母様が注意すべきことなのだが、彼女が今までフルーラに何か注意しているところは見たことがない。

できればフルーラに見つからぬうちに出発したかつたけれど、見つかってしまった。どうやつておとなしくさせようかと考える間もなく、フルーラはレオンハルト様を見つけ笑顔で駆け寄つてくる。

「あ。レオンハルト様、おはようございます！ 今日から送り迎えしてくださると聞いて、うれしいです。それなのに一人で行つてしまふなんて、お義姉様つてば本当に意地悪なんだから！」

満面の笑みでレオンハルト様に挨拶した後、私へは拗ねたような顔をしてみせる。

いつもなら私に怒鳴つっていてもおかしくないが、さすがにレオンハルト様の前だから抑えているらしい。

せめてレオンハルト様に会わせる前に説明しておくべきだった。

こんな風に可愛らしく挨拶されたら、レオンハルト様だってフルーラのことを気に入れるだろう……

三人で馬車に乗るのかな……そう思つたら、胸がきしんだような気がした。

「どこの令嬢かは知らないが、俺は君を送り迎えしないよ。俺はレイフィアを迎えてきた。邪魔しないでくれ」

一瞬誰が話しているのかと思つたくらい、レオンハルト様の声は冷たかった。いつも柔らかさではなく、硬質な隙のない話し方に驚く。

レオンハルト様は冷たい表情でフルーラを見ている。これは誰なの？

「……え？」

「聞こえなかつたか？ 君に用はないって言つたのだけど」

「そんな！ ひどい！」

「知り合つてもいない男の馬車に乗り込もうとするような、恥知らずな令嬢は必要ない。失礼するよ」

レオンハルト様に冷たくされたのが予想外だったのか、フルーラの顔は怒りで真っ赤になつた。それなのにレオンハルト様はフルーラを見もせずに、私の手を取つて馬車へと乗せてくれる。

気がついたら馬車はもう走り出していた。

遠くから何か叫ぶ声が聞こえたが、聞こえなかつたことにしたい。

今のはなんだつたのかとレオンハルト様を見ると、何もなかつたかのよう平然としている。

あのフルーラがこんなにあつさりと袖にされるなんて。ダメ……耐えきれない。

「ん？ レイフィア？ 大丈夫？」

「……ふふっ！ ふふふふっ！ フルーラにあんな顔させるなんて！ レオンハルト様つて毒舌だったのですか？」

笑いをこらえきれなくて、声を上げて笑つてしまつ。

はしたないとえきれなかつた。

断られるなんて少しも思つていなかつたフルーラは、何を言われたのかわからなくて一瞬きょとんとしていた。何年も一緒に暮らしているけれど、あんなフルーラは初めて見た。

「知らなかつたか？ 俺は毒舌で冷たくて有名のようだが」

「有名なのですか？ 知らなかつたです」

本気で言つてゐるのか真面目な顔のレオンハルト様がおかしくて、笑いが止まらなくなる。

こんなに笑つたのは何年ぶりだろうか。苦しくて涙が出そうなくらいだ。

「よくわからないけれど、レイフィアが楽しそうでよかつた」「ええ」

帰つたらフルーラに何か言われるだろうけれど、それでも気持ちがすつきりしていた。

その日も一日中レオンハルト様の隣で授業を受けて、あとは帰るだけとなつた。

いつもならそのまま帰宅するのに、今日はレオンハルト様が廊下で誰かに呼び留められた。その方と二、三言葉を交わすと戻ってきたが、少し表情が曇つている。「ごめん。ちょっと学生会に呼ばれてしまつた。すぐ済む用事だから、ここで待つてくれる？」

「わかりました。本を読んでいますね」

レオンハルト様は学生会役員ではなかつたはずだけど、何か相談でもあるのかもしれ

この学年には王族も高位貴族も多く在籍している。学生会として行事を行う時に彼らへ不手際があれば咎められることもある。おそらくそうならないようになにかうに事前に相談されているのだと思う。

教室でこのまま待つのは問題ないし、気にしなくてよかつたのに、レオンハルト様はもう一度、すぐ終わるからと言つて出ていった。

それほど長い時間ではないだろうし、本を読んでいれば退屈しない。

最近はレオンハルト様と一緒にいることが多いから本を読まずにいたが、読みかけの本がカバンの中に入っている。

取り出して続きを読み始めたけれど、どうにも内容が頭に入っこない。おかしい……ついこの間まではずっと一人で過ごしていた。時間があれば本を読んでいたし、何も問題ないはずだった。

時間がたつにつれて落ち着かなくなる。

一人で過ごすことに慣れていたはずなのに、今はレオンハルト様の不在が気になつてしまふ。

お手洗いにでも行けば落ち着くかもしれないと思って、教室の外に出る。

もうあたりは人が少なくなつていた。

お手洗いを済ませたところで、そういうえばレオンハルト様はすぐ終わると言つていたことを思い出し、急ぎ足で教室へと戻ろうとした。

廊下を曲がったところで思わず人に呼び止められ、その声の主がわかつた瞬間に身構えた。

栗色の髪と薄茶色の意地悪そうなつり目で、ずんぐりとした身体に大きな声。

「よう、レイフィア。久しぶり。あまり学園内で会わなかつたな」

隣の領地のペトロフ伯爵家の次男ジヤンだつた。

話すのは数年ぶりだけど、あいかわらず嫌な笑い方をしている。昔からからまれることが多く、苦手な幼馴染だ。

いるのはわかつていたから、学園の中では会わないようにと気をつけて行動していたのに。

「ちょうどいいや。お前に話があつたんだよ。ちょっと来いよ」

私の返事も聞かないジヤンに腕をつかまれて、ぐいぐいと引つ張られる。「ちょっと、やめて。さわらないで」

やめるように言つても離してもらはず、なぜかにやつと笑われる。

「何言つてんだよ、将来の旦那様に。恥ずかしがるなよ」

何を考えているのか、やつぱり人の話を聞いてくれない。本気で嫌がつているのに、力では敵わず振りほどけなかつた。

「やめて。あなたとなんて結婚しないわよ。離して！」

「はあ？ 何言つてんの？ お前をもらつてやる奴なんて、他にいるわけないだろ。

いいから、おとなしくしていろよ」

ジャンが私を空き教室に連れ込もうとしているのがわかつて血の気が引く。こんな人がけのない時間にそんなところに二人でいるのが見つかつたら、既成事実にされかねない。

どうしよう。抵抗しているのに力が強くて引きずられる。怖い。

どうすることもできず、空き教室のドアの前まで来た瞬間。ダン、と大きな音が響いて、手を離された。

音のしたほうを見ると、ドアをレオンハルト様が蹴つていた。ジャンは見るからに真っ青な顔になつていて。

「お前、何をしている？」

いつも低いレオンハルト様の声が、もつと低い。もしかして怒つている？

「いえ！ 何もしていません！ この女は婚約者でして。話をしようと思つただけです」  
婚約なんとしたこともないのに嘘を言い出したジャンに反論しようと思つたけれど、それよりも早くレオンハルト様が口を開いた。

「レイフィアは俺が婚約しようと申し込んでいたのだが。それに伯爵からはレイフィアに婚約者がいるとは聞いていない」

「えつ」

「なあ、俺はそんな話は聞いていないのだけど、婚約者だつて？」

「いえ、すみません。僕の勘違いです……」

「そうだよな。まさか公爵家の婚約者となる令嬢に何がするつもりか？」

「い、いいえ！ しません、しません！ すみませんでしたあああ」

あつけなく走り去つたジャンを見て、ほつとする。

その瞬間、かくつと膝の力が抜けて座り込みそうになつた。もう少しで床につくところで、レオンハルト様に抱きしめられる。

「大丈夫か？ 一人にして悪かつた。腕を見せてくれ」

「ドアじゃなく、あいつを蹴ればよかつた」  
レオンハルト様はそれを見ると顔をしかめて、怒り足りないようすに低い声でつぶやき、さつと私を抱き上げた。

「えつ。レオンハルト様、下ろしてください！ 少し落ち着けば歩けます」

「このまま医務室に行くよ。早く冷やさないと。落とすのは嫌だから暴れないで。この時間なら他の学生もいないし、大丈夫だ」

足に力が入らないのも、腕を痛めているのも事実で、反論できない。

それに、今思い出しても怖くて、落ち着くまで時間がかかるのはわかつていて。

だからと言つて、抱き上げられて運ばれるなんて……誰かに見られたらどうしよう。

背中に回されている腕はともかく、どうしても片方の腕が外側から回されているのだろう。

いわゆるお姫様抱きではなく、子どもを抱きかかえるみたいな……いえ、これは抱きしめられていると言つていいと思うのだけど。

レオンハルト様の胸に密着させられて、制服につけられているほのかな香水の匂いに気がつく。これほど近くに寄らなければ気がつかないほどのささやかな香り。私以外にも知つていてる人はいるのかなんて思つてしまい、変な考えを打ち消した。

抱き上げられたまま医務室に入ると、先生に驚かれた。

先生が治療するのかと思つたら、レオンハルト様が先生から湿布しふぶを受け取つていて。

腕といつても手首に近いところだし、ちょっと制服をめくれば見えるのだけど、令嬢を治療するためにある専用の休憩室へと連れていかれた。

「そこまでしなくとも、これくらい平気ですよ？」

見た目は痛々しく見えるかもしれないけれど、數日もすれば痛みはなくなるだろう。

「俺がレイファイアを守るつて言つただろう。困つたことがないようすに、きちんと守つて言つたのに。それなのに、隙すきを作つてしまふなんて……すまない」

「そんな。これはレオンハルト様のせいじゃないのに」

「俺がレイファイアを守るつて言つただろう。困つたことがないようすに、きちんと守つて言つたのに。それなのに、隙すきを作つてしまふなんて……すまない」

「謝らないでください。私も油断していました。教室から出なかつたら、あんなのに会わないので済んだのに」

ずっと避けていたのに、それを忘れていたなんて。

レオンハルト様のことで頭がいっぱいで、警戒していなかつた私が悪い。なのに、何を言つてもレオンハルト様はうなずかなかつた。

「あれは、誰だ？ 婚約者と言つていたが、そんな話が出ているのか？」

「まさか！」

「じゃあ、どうして。あいつは何をしようとしていた？」

「彼は、うちの隣の領地のペトロフ伯爵家の次男でジャンといいます。小さい頃から顔を合わせる機会が多かつたのですが、付きまとわれていたため昔から苦手で。大きくなつたら結婚してやるなんて、いつも上から目線で……ジャンは伯爵家を継げないので、うちが持つてている子爵位がほしいのだと思います」

「ああ、ルガード伯爵家は子爵位も持つていたな。お兄さんが伯爵位を、レイフィアが子爵位を継ぐ予定だったのか？」

「いいえ。……おそらく、お父様はどちらもフルーラに繼がせるつもりでしそう。お父様が再婚してフルーラがうちに来たのは私が十一歳の時なのですが、お母様が亡くなつた後はあまり交流がなかつたので、ジャンはフルーラのことをよく知らないのです」

「そういうことか……」

「それにしても……レオンハルト様が私に婚約を申し込もうとしているなんて。そんなことを言つてしまつてよかつたのですか？」

「ああ、それは大丈夫だ。詳しい話はまだ言えないけれど、ちょっと事情があつて。でも、婚約するつて言つたことは問題ないから心配しないでいい」

「そんな……」

公爵家のレオンハルト様が婚約を考えているなんて、軽々しく口にしていいはずはないのに。もしこれでレオンハルト様が家の方に何か言われたりしたらと思うと不安になる。

レオンハルト様はもうこの話を続ける気はないのか、無言で私の腕に湿布を貼つてめくつていた袖を直してくれる。それが終わつたら、休憩室の外へと声をかけた。

「ジョセフ」

「呼びました？」

返事があつたと思つたら、ドアが開いて男性が一人中へと入つてくる。

こげ茶色の髪に同じ色の瞳。すらつとした長身の男性は執事服を着ている。見た目からして二十代後半くらいだろうか。

学園内に使用人を連れてきてはいけないはずだけど、公爵家の方だから特別なのかも

しない。

「レイファイア、これはジョセフ。うちの執事見習いをしている」

「レイファイア様、ジョセフと申します。執事見習いと言いつつ、ほとんど若様専用の隠密です。なんでも申し付けてくださいね」

「は、はい。よろしくお願ひします」

「隠密って普通は隠すものだし、冗談なんかと思つたけど、二人とも笑つていなかつた。もしかして本当に隠密なのかしら。じつと見ていたら、レオンハルト様が軽くため息をついた。

「余計なことは言わなくていい。ジョセフ、ジャンとその周辺、調べておいてくれ」「かしこまりました」

ジョセフはうなずいて、すぐ休憩室から出ていく。

聞きたいことが多すぎて混乱していると、レオンハルト様に手を差し出される。

「さあ、レイファイア。遅くなる前に帰ろうか」

微笑んでいるレオンハルト様に聞いてはいけないような気がして、黙つて手を乗せた。

カタコトと進む馬車に揺られ、我慢していたのに、うとうとしてしまう。

伯爵家の馬車とは違い、揺れの少ない公爵家の馬車は乗り心地がよすぎた。

今日は、というよりもレオンハルト様と関わってからいろんなことがあつた。思つていたよりも疲れがたまつっていたのかもしれない。頑張つてはみたけれど、眠気に勝てずに意識を手放してしまつた。

「ねえ。あの子はどうしましよう？ 長男はともかく、娘は一人もいらないわよねえ」「レイファイアはそのうちどこかの後妻にでも出せばいい。持参金がもつたいないからな。できれば支度金を積んでくれるような家だといいんだが」

「そうねえ。あの子が固有スキルを持つてたら、その分高く売れるかしら」

「あいつの娘だからな。固有スキルを持つてるかもしれない。黒髪だしな。……忌々しい」

「うふふ。自分の娘なのに、ひどいこと言うのね」

「あいつが産んだからと言つて、俺の娘とは限らん。黒髪も緑目も俺とは全く違う。あ

いつそつくりだ。浮気相手にでも似ていれば、すぐにも追い出せるというのに」

「ね、お父様、お母様。お義姉様はフルーラの本当のお姉様じゃないの？」

「ああ、違うよ。俺の娘はお前だけだよ、フルーラ。あんなのはそのうち消えるから、気にしなくていいんだよ」

ああ、これは何度も見た夢だ。久しぶりに見た気がする。

夢だけど、本当にあったことだった。お父様とお義母様の話をこつそり聞いてしまった場面だ。

お母様が亡くなつてひと月もたたずにお義母様とフルーラがやつってきた。

その日、夢と同じ会話を聞き、フルーラとは血のつながりがないと思つていたのに、お父様の裏切りを知つてしまつたのだ。

お父様が本当の娘だと思つているのはフルーラだけ。

私は愛されていないどころか疎まれている……

教会で鑑定してもらい、私の固有スキルがわかつたのは、この一年後のことだつた。一人で行つた教会からの帰り、私は固有スキルのことは誰にも話さないと決めた。お父様たちに知られたら、どこかに売られてしまうと思つたから。

忙しそうにしているお兄様にも相談できなかつた。

固有スキルのことは絶対に隠し続けなければいけない。

見つかつたら、私はどうなつてしまふのか……お母様……私はどうしたらいいの？

## 第二章

母上が亡くなつた。

王宮のお茶会に呼ばれて、いつものように出かけていつた母上は、真っ青な顔をして帰つてきた。

そして屋敷に着いた馬車からなんとか降りると、そのまま倒れるように気を失つた。毒を盛られたのかと思つて医術師を呼んだが、毒の反応は何も出なかつた。

それなのに母上は日に日に衰弱していき、一度も起き上がることなく半年後に亡くなつてしまつたのだ。

母上の葬儀の日、起きてこない兄上を最初に発見したのは侍女だつた。

どう見ても母上と同じ症状だったことから俺は会わせてもらえず、兄上は侍女と離れに隔離された。

もしかしたら感染症なのかと思われたが、兄上以外に同じ症状が出た者はおらず、たまたま似た症状の病気になつたと診断された。

父上は母上の葬儀には出席したものの、終わるとすぐに別邸へと帰つていつた。